

ドS社長の過保護な執愛

本郷アキ
Aki Hongo



目次

△△社長の過保護な執愛

夫婦で、ライバルで、誰よりも好きで

書き下ろし番外編

ずっと二人で

ドS社長の過保護な執愛

第一章

紗絵は、今年も花見をしないまま桜の季節が終わりそうだな、と物悲しい思いで、ガラスの向こうの街路樹をデスクからぼんやりと眺めていた。

「本田、この図面、全部作り直せ」

突然、上司である榎谷明司の鋭い声がオフィスに響き渡る。

明司は偉そうに椅子にふんぞり返り、腕を組みながら顎をしゃくった。

「えっ!?」

紗絵は慌てて立ち上がり足を踏み出す。その拍子に、椅子に膝を強くぶつけてしまい、じんと響くような痛みが走った。

「いったあつ！」

思わず足を押さえて蹲った途端、椅子ががたんと大きな音を立てる。なにかが背もたれに引っかかったのかもしれない。

「わっ、やば」

紗絵は慌てて椅子を支えてほつと息をつく。

「あ～びっくりした」

すると、即座に「やかましい」と、明司の大きな声がした。そっちの方がよほどやかましいのでは、と心の中でだけ難癖をつけて、立ち上がった。肩の下まで伸びた茶色の髪が唇にべたりと貼りつく。それを手櫛で整えて、椅子を元の位置に戻す。

「お前な……もうちょっと落ち着けないのか？ あっちにまで聞こえるだろうが」明司は応接室にちらりと目を向けてから紗絵を見込んだ。応接室ではクライアントとの打ち合わせが行われている。

「うるさくしてすみません……で、あの、作り直してください？」

紗絵は呆れた顔をする明司の前に立ち、前のめりにデスクに手を突いた。

この春で、紗絵が桜谷住宅で働いて丸六年になる。社長である明司とのこういったやりとりは日常茶飯事であった。

「そのままだ。間違ってる」

明司はデスクの上に置かれた図面をとんと人差し指で突いた。その仕草にイラッとしたものが込み上げてくる。

「どこですか？」

提出する前に数値は何度も確認したはずだ。間違いないことも確認している。

「一箇所な。ここ。お前、コピペしただろ」

彼が指差した先には、ほかの図面からコピーした数値がそのまま残っていた。この案件はそれと使用する断熱材の厚さが違うのに、変更するのを忘れていたらしい。思わず、うわっと声が出そうになるのをなんとかこらえて、頭を下げた。

「ほんとだ！ すみませんっ！」

「チェックお願ひしますつて持ってきた時の、あの自信満々な顔はいったいなんだったんだ」

「何度もチェックしたので、間違いないはずだと思って」

「本田は思い込みが激し過ぎる。間違いないはずだ、って何度も目だ？」

「はい……」

「数字だけを見てるからこういう間違いが起きる。このまま出してもクライアントは気づかないだろうが、もしもこれが現場で反映されたらどうなる？ コストは大幅にアップし、さらに要求性能を満たせていないから工事のやり直しだ。どれだけの損失が出るか考えろ。トイレの便器にドアが当たつて開きませんけど、契約書にサインしたのはそちらですよね？」とでも言うつもりか？」

「申し訳ありませんっ」

そんなこと言われなくとももちろんわかっている。ミスをしたのは自分で、悪いのも自分だ。

明司の言う通り、紗絵の作成した図面では断熱材の厚さが間違っているせいでトイレの面積が変わってしまい、そのまま作るとドアが便器に当たつてしまっていた。

もしもミスに気づかないでいたらと考へると、顔から血の気が引く思いがする。

「お前のうつかりミスでこんな家を造られたクライアントはたまつたもんじゃない。こういう単純なミスほど気づかないものなんだ。慣れてきたからつて自分を過信するな。間違いないはずだと思うな。絶対にミスはあると思ってチエックしろ。お前は学生時代にもう少し寸法感覚を学んでおくべきだったな。ちゃんと卒業したのか？」

やれやれとバカにするように鼻で笑われ、返す言葉もない。

（そこまで言うつ！ 腹立つー！）

紗絵は、口元を引き攣らせながらすごすこと自席に戻った。

紗絵が働く槌谷住宅は、明司の父親が社長を務める槌谷建設の子会社だ。

槌谷建設は高層マンションや大型商業施設などを手がける大手建設会社だが、その子会社である槌谷住宅は、自由設計を売りとして主に個人向けの住宅や中規模のマンション、店舗の設計を手がけている。

所となつており、社員数は二十名ほどと少ない。

槌谷建設は大手だが、子会社である槌谷住宅は設立してまだ六年の若い会社だ。一級建築士で、さらに有名な建築家でもある明司のネームバリューのおかげで客は引きも切らないが、実績はまだ十分とは言えないだろう。

紗絵は大学卒業後、槌谷建設に就職し、現在は槌谷住宅に出向という形で働いている。設計士として明司のサポートをしているが、クライアントの資金計画の相談に乗るのはもちろん、現地調査をしたり、建築確認申請のために役所を訪れたり、時には土地探しも行う。設計士という名のなんでも屋で、日々、明司にこき使われていた。

動き回る日も多く仕事は膨大で、疲れて食事もとらずに寝てしまうことも多々あり、太る暇もないくらい忙しい。

とはいゝ、社長である明司は紗絵以上に忙しい。設計担当としてクライアントとの打ち合わせにも参加するし、図面の最終チェックは必ず明司が行っている。

(初めて会った時は、あの槌谷明司と仕事ができるって浮かれてたし、そのイケメンつぶりに見蕩れちゃつたけど、翌日には後悔することになるつて、あの頃の私に教えてあげたい)

紗絵は自分への情けなさに対するため息を呑み込んで、デスクにいる明司に視線を向けた。

年齢は、二十八歳の紗絵よりも三つ上の三十一歳。誕生日は一月。身長は百八十。家族構成は両親と明司の三人。槌谷建設社長の息子というハイスペックなエリートである。さらに言えば、見た目も抜群に良かつた。

真っ直ぐで豊かな黒髪から覗く男らしく太い眉に、鋭く細められた目。どこか日本人離れした彫りの深い顔立ちは、見るものをハッとさせるほど整っている。

手足の長さ、バランスのいい体躯^{（たいじく）}、凜々^{（りり）}しい立ち姿を含めて、悔しいことに見た目には欠点と言える部分が一つもない。

気品のある立ち居振る舞いや、彼の立場を考えても、女性から引く手数多^{（あまた）}であることは間違いない。

(それなのに性格がこんななんて、残念過ぎる)

大学時代から明司のファンだった紗絵の頭には、彼の詳細なプロフィールがインプットされている。

性格がどうだろうと、彼の建築家としての腕は最高だ。しかし、もう少し優しい性格ならばと考えてしまうのは致し方ないことだろう。

(建築家としてたまにテレビに出てるから、社長目当ての冷やかし客がけつこう来るし、モテないわけがないんだよね。でも、恋人にも『君は情緒というものをもう少し学んでおくべきだったな。幼稚園は卒園したのか?』とか言つてそう。どれだけイケメンでも、

社長とプライベートでまで付き合うなんて私は絶対やだな）

紗絵は自分の想像で噴きだしそうになるのをなんとかこらえ、隠すように口元に手を当てた。こんなところを見られたら、また嫌味の百や二百が飛んでくる。

（ま、社長に恋人がいてもいなくとも、私には関係ないんだけどね）

ただ、これまで幾人の女性を虜にしてきたのだろうと考えると、あまりお近づきにはなりたくない。明司ほどの男が自分を恋愛対象とするわけがないとわかつていても、恋愛経験が少ないなりに自分の中にある警戒心が、この男に近づいたら危ないぞと信号を発している気がするのだ。

（私に恋愛する暇がないのも、社長のせいだけどっ！）

明司に近づく予定もないし、厳し過ぎるこの上司に恋愛感情を抱く予定もないが、なんだか悔しくはある。いろいろなところでモテモテの明司と違つて、紗絵には出会いも出会いを作る時間もないのが現状だ。

（でも、『ずっと住み続けられる家』は、本当に……本当に素敵だったのに！ あれを造つたのがこの鬼上司だなんて！）

紗絵は大学時代、建築学科に在籍していた。

そしていつかは一級建築士になる夢を抱いていたのだが、明司との出会いで自分がいかに凡人かを知ることとなつたのだ。

それは、紗絵が建築デザインの国際コンペに挑戦した時のこと。
建築部門のテーマはサステイナビリティ。時代に合ったテーマだと意気込み、会心の作品で勝負に出たつもりだった。

ここで賞を取つたとしても華々しく建築家デビューなんてできる業界ではないけれど、就職に有利になるだろうし箔^{はく}がつくと思っていた。

けれど結果は惨敗。佳作にさえかすりもしなかつた。

最優秀作品賞は、紗絵と同じ大学生の『ずっと住み続けられる家』という模型^{きょうじ}だった。なんの捻りもない普通のタイトルだな、と鼻で笑つたのは、粉々になつた自分の矜持^{きょうじ}をなんとか保つためだ。

国際コンペとはいえ、応募は学生が中心。海外の受賞作品はインターネットで閲覧が可能で、国内の受賞者は小さな会場で授賞式と展示が行われた。

どんな作品が最優秀作品賞に選ばれたのかと会場に足を運んだ時、一目でその作品に心を驚き^{わしづか}にされた。

どれだけ自分が手を伸ばしても届かない才能があると思い知つた。悔しかつた。どうして自分が選ばれなかつたのかわかつてしまつたから。嫉妬の感情が芽生えただれど、それ以上に柏谷明司という男の才能に惚れて、憧れてしまった。

友人や先輩、講師にも褒められうぬぼれていた紗絵の作品は、賞を取るためのもの

だつた。テーマに則つた優れたデザインの模型ではあつても、それだけだつた。そこに誰が住んでどういう生活を送るかなんて、まったく頭になかったのだ。

でも彼の作品は違つた。きちんとそこには存在し、まるで生活をしているみたいだつた。

全身に鳥肌が立つような感動を覚えて、紗絵はしばらくその場から動くことができなかつた。

実際に彼の造つた家を見たいと思つたし、その家に住みたいと思つた。だから彼を追いかけて、槌谷建設を就職先に選んだのだ。

明司はその後、二十代の若さで一級建築士の資格を得て、とある美術館の設計を担当した。

それが^{またた}瞬く間に評価され、最年少で建築を通じて環境に貢献した人に与えられる権威ある建築賞を受賞するに至つた。

建築家、槌谷明司の名前はこの業界にいれば必ず一度は耳にする。初めて本人に会えた時、紗絵がどれだけ興奮し嬉しかつたか。もちろん今もその気持ちに変わりはないし、彼への尊敬の念も失せていない。だが――

（社長を追いかけてきたことは後悔してない……してないけど、チクチク、チクチク重箱の隅を突いて楽しむようなＤＳだとは思わなかつた！　いや、ミスした私が悪いって困るのはお前じゃない。これから先、その家に住む人だ）

「はい……」

デスクの上には、修正するための図面が束となつて置かれていた。パソコンの画面が半分ほど隠れてしまつていて、自分の失敗のせいで明司の仕事まで増やしていると思うと、よけいに悔しい。

「過去事例集に目を通したら、これがあり得ない図面だつてわかるはずだ。つてことでやり直し、全部、今すぐ」

紗絵は肩を落としながらデスクの上にある紙の束を自分の方へそつと引き寄せ、がつくりと項垂れた。胸の内で盛大に彼を罵倒し誤魔化しているが、本当は誰より不甲斐ない自分に腹が立つていて。紗絵は滲みそつうになる涙をこらえ拳を握りしめた。

憧れていた槌谷明司はたしかに才能の塊だつた。尊敬する人の仕事を間近で見られる。一緒に仕事ができるなんて夢のようだと入社当時は喜んだ。

ただ、あの頃の紗絵は知らなかつた。明司がこんなドＳ鬼上司だつたなんて。

仕事が厳し過ぎて本気泣きしそうになつたことも、高く積み上がつていく終わりの見えない仕事に心が折れそうになつたことも数知れず。
 （まあ、一番仕事を抱えて最高の結果を出す人だから、みんなついていくんだけどさ。それでも悔しいっ！ いつか見返してやるんだからっ！）

紗絵はふんっと鼻を鳴らす。

「聞いてるのか？」

さらに鋭くなつた目で睨まれ、口元を引き締めた。

「はい、すぐに直します！」

「反応が遅い」

「次から次へと言われるので、頭がパンクして、社長の言葉を理解するのに時間がかかるんです」

紗絵は唇を尖らせて、ふいつと目を逸らした。

失敗が多いのはわかつてゐるし、反省もしている。でも今まで、二度注意されるようなミスはしていない。

それでも口が達者な明司に矢継ぎ早に責められるとダメージは大きい。ぐうの音も出ないほどの正論だからよけいに。

（本人は責めているつもりはないんだろうし、私の言い分だつて聞いてくれる。被害妄想だつて思つていいんだから）

想だつてわかつてゐるけど、なんかもう悔しいし悲しい……）

憧れていた上司が厳しいとわかつても、がつかりはしなかつた。むしろ、彼の仕事に対する姿勢をますます尊敬したし、一緒に働けて良かったと思つてゐる。

（でも、もう少し優しければなあ。この性格がさあ）

明司はドS鬼上司だが、誰にでも嫌味を連発してゐるわけではない。

負けず嫌いな性格のせいで、紗絵がぽんぽん言い返すからだ。それをわかつていながら彼が紗絵をいじつてくるため、なおさらこちらもヒートアップしてしまつ。

「パンクするほど頭使つてないだろ？ それに、性格の悪さでお前に迷惑はかけてない。人の性格をとやかく言う前に、その迂闊さをクライアントの前で披露しないよう口を縫いつけておけ！」

「え……声に出てました？」

紗絵はやばいと口に手を当てた。赤くなつたり青くなつたりしながら、ちらちらと明司を見つめる。

「お前な……そういうところだぞ。声に出てなくても丸わかりなんだよ！」

明司は心底疲れた表情で深いため息を漏らした。いい加減にしてくれと言いたげだ。

「あ、良かった」

「良くない！ その喜怒哀楽でころころ変わる顔もなんとかしどけ！ 怒られて不服で

すつて顔、絶対クライアントの前でするなよ？ クレームを入れてくるようなクライアントに当たって問題になつたら、お前の評価にだつて関わつてくるんだからな？ 「してませんし、お客様からクレームなんて入つたことありませんから！」

「俺はこれから話をしてるんだ。はあ、もういい。お前と話してると疲れる。さつさとその図面を作り直して再提出！ 急げよ？ 今日中だからな？」

「はい！」

「返事だけは素直だな」

やれやれと呆れたように肩を竦めながらデスクに戻つていく明司を横目に、早速修正に取りかかった。

付箋を一枚ずつ確認すると、自分のうつかりさに泣きたくなる。

(チエックしたのに、なんで見つけられなかつたかなあ……私のバカ)

断熱材の厚さを数センチ間違えるだけで、今の住まいから持ち出す予定の家具が入らないという可能性だつてある。それ以前にミスがわかつた段階で基礎工事からやり直しになるし、信用をなくすだろう。

ほかにも所々に付箋が貼りつけてあり、その細かさにうんざりするよりも、的確な指示を出す彼にやはり傾倒してしまう。

今明司と同じ歳になつても、同じように仕事ができるとは思えない。

(私も、いつか……一級建築士になれるかな)

明司を見ていると自信がなくなつていくばかりだ。それでも負けたくないと思う。明司より時間がかかつたとしても、建築家の夢を諦めたくはない。

紗絵がすべての図面を修正し終えてOKが出た時には、二十二時を過ぎていた。ほとんど同僚はすでに退社していて、残っているのは自分と明司だけだった。

「お先に失礼します」

「ああ、お疲れさん」

明司に声をかけて会社を出ると、冷たい風に身を震わせる。三月の終わりとはいえば肌寒かつた。紗絵は薄手のコートの前をかき合わせながら駅へ向かう。紗絵が住んでいるのは会社から地下鉄で三十分、さらに徒步で十分ほどの場所にあるワンルームマンションだ。

駅周辺は繁華街や商店街で朝から夜まで賑わい、コンサートホールや劇場、ショッピングモールといった大型施設もある。

さらにJR線や、地下鉄でどこへ行くにも困らないとくれば、築年数四十年の物件ながら多少家賃が高いのも仕方がない。

いつものようにアーケードのある商店街を歩く。店はほとんど閉まつているが、夜でも明るい商店街を通つて帰るサラリーマンは多かつた。商店街を抜け、オフィスビルが

建ち並ぶエリアを通り過ぎると、五階建てのマンションが見えてくる。

(今日はかなり遅くなつちやつたな。でも、ようやく今週も終わつた)

紗絵はスマートフォンの時刻を見てため息をついた。連日の残業に身体は疲れ果て、足下が覚束ない。明日が土曜日で仕事が休みなのがせめてもの救いである。

マンションのポストからは、チラシやなにかが溢れていた。

（なんいろいろ入つてると、見るのは明日でいいや……今日はもう寝よう）

紗絵は重い身体を引きずりながらマンションの階段を上がり、部屋に辿り着く。

玄関のドアを開けて靴を脱ぎ捨てたところで、ごろりとフローリングに寝転がつた。

ベッドがすぐそこにあるのに、眠くて眠くて仕方がない。

意識がすっと遠ざかっていき目を瞑るや否や、ほとんど気絶するように寝入つてしまつた。

「ふえつくしゅんっ」

自分のくしゃみに驚いて目を覚ますと、フローリングで寝ていたためか、肩や背中がじんじんと痛んだ。

「うわ、また床で寝てたよ……いたたたた……」

紗絵は、凝り固まつた身体をのろのろと起こし、コートをソファードに投げた。バッグを床に置くと、そのままバスルームへ直行する。

半分目を瞑りながら、シャンプーを手に取り髪を泡立てるが、なぜかいつも匂いが違う気がする。

「なにこれ？ ボディソープ？ まあいいや」

自分が頭につけたのはシャンプーではなかつたようだ。

実家にいた頃、母にも兄にも言われたが、紗絵はうつかりやらかすことが本当に多い。

疲れないとそれがよけいにひどくなつてしまつらしい。一人暮らしを家族全員に止められただくらいただ。

シャンプーとトリートメントを間違えるのもしょっちゅうで、洗い直すことも珍しくなかつた。

仕事に必死になればなるほど私生活がだめになる。それを明司が知つたら、きっと今まで以上に呆れられるだろう。彼に追いつくなんて口で言うのは簡単だが、実際にはどれだけ必死に走つても追いつけないくらいの距離がある。ただ、そうとわかつていても諦めたくないだけだ。

「疲れた！」

髪を適当に乾かし、おざなりに顔の保湿を済ませて、ベッドに飛び込む。寒さに全身を震わせながら毛布にくるまつた瞬間、紗絵はすとんと眠りに落ちた。

「うそ～寝過ぎ……私、何時間寝てたの？」

短針は四を指していた。一週間分、泥のように眠ったからか、かなりすつきりしているが、深夜に寝たのに四時間ほどで起きられるなんて非常に珍しい。

朝にしてはやけに明るい室内に困惑し、スマートフォンを確認した。時刻は十六時である。

「あれ？ もしかして朝じゃない？」

身体がギシギシいうわけだ。紗絵は頭や腕をぐるぐる回しながらベッドを下りて、洗面所へ向かった。

スタイルをせずに寝てしまつたが、髪は多少寝乱れているだけだ。癖のつきにくいストレートの髪は楽でいい。

軽く髪を梳かして、洗顔する。しっかりと肌をケアしながら一週間分の疲れを落とし

ていると、お腹からきゅるきゅると音が鳴つた。

(……うちになんか食べるものあつたつけ？)

コンビニで購入した生野菜と、冷凍したご飯にレトルトカレー。それらを皿に盛りつけ、小さなローテーブルに運んだ。

「いただきます」

料理は好きでも嫌いでもなかつたが、ここ最近まともに料理ができるていないのは仕事が忙し過ぎるせいだ。せめて栄養バランスのいい食事をと考へてはいても、手軽さには抗えない。しかし、洗わずに食べられる生野菜にも飽きてきた。

(ミスさえしなければ、昨日はもう少し早く帰れたはずなのに)

とにかくケアレスミスをしないようにしよう。

紗絵は決意を新たにし、食事を進める。住宅の設計は正解のない問題も多く、あとはとにかく経験を積むしかなかつた。

「あ、そうだ」

食事を済ませて食器を洗い終えたところで、昨夜、エコバッグの中に大量のチラシを突っ込んだことを思い出した。ほとんど目を通す必要のないチラシばかりだと思うが、そのまま捨てるわけにもいかない。

一枚ずつ見ていくと、同じ手紙がたくさん入っていることに気づく。

「あれ、これって……」

手紙はこのマンションを管理している不動産会社からで、一週間おきに何通も来ていました。内容はほとんど同じで、四月には建物を取り壊す工事に入るため、すぐに退去を求めるというもの。

「そういえば、一年以上前、マンションの入り口に貼つてあったたじやないか。
『そうだ、ここ建て替えで取り壊すんだった。うわっ、うそ、四月つてあと一週間しかないじゃん！』

知らなかつた、じや済まされない。知つていたのだ。建物の老朽化で外壁の一部が剥がれ落ちてきて、廊下の柱にヒビが見つかつたため建て替え工事を行うと。

けれど、あと一年もあるしと放置していたのは自分だ。己の迂闊さをこんな時に呪いたくなるなんて。

（だからこそ最近、登録してない番号から何件も電話があつたんだ……たぶん、管理会社だよね……なんか引っ越ししていく住人が多いと思ってたんだよ！）

連絡がつかない、手紙の返信もないでは、管理会社も困つただろう。
仕事が忙しかつたし、知らない番号だったから出なかつた、なんて言い訳だ。
あの鬼上司ならば残念そうな目をしながら言うだろう。『お前、プライベートでもうつかりし過ぎじゃないか？』と。

動搖のせいで、つい明司のドSっぷりを思い出してしまつたが、ひとまず冷静になつてこれからのことを考えなれば。

（明日の休みで部屋を決めるとか無理だし。そうだ、部屋が決まるまでお兄ちゃんのところに避難させてもらおう。あとは引っ越しの手続きをしなきゃ。お金なんて使う暇もないから、贅沢に梱包は全部お任せにするとして。うん、よし、いける気がしてきた）
兄の誠は、紗絵の五つ上の三十三歳だ。実家を出て一人暮らしをしているマンションはファミリータイプのため、紗絵が居候しても広さに問題はない。

それに出張が多く、一年の半分ほどは部屋を空けているため、たまに換気と掃除をしてくれと頼まれるから、合い鍵を預かつてている。だめとは言われないはずだ。

「お兄ちゃん、日本にいるかな

誠に電話を入れると、すぐに電話は繋がつた。

「あ、お兄ちゃん？ 私
『なに？』

『わかつた。俺、一ヶ月ほどいないから、空いた部屋を使つていい。その代わり俺が帰つたあの掃除もゴミ捨ても全部お前な？　あと、さつさと引っ越し先を決めて出でいくこと。邪魔だから』

「はい、すみません」

明司に返事をするようく小さくなつて答えると、兄にふんと鼻で笑われた。

『珍しく殊勝だな』

「昨日上司からも迂闊だつて怒られたから、ちょっと反省してるとこ」妹の仕事にまつたく興味がなかつたのか『へえ』とだけ返され、電話を切られたのだった。

第二章

次の土曜日。引っ越し業者に来てもらい、荷物をすべて運び出した。

すぐに使うものや貴重品は手荷物として運ぶため、けつこう重い。

紗絵は最後に退去の手続きを取り、兄のマンションへ急いだ。

兄が住む部屋は品川区内に建つ二十階建ての分譲マンションだ。

築年数は新しく、駅からもそれなりに近い。住人はファミリー層が多いらしい。オートロックにコンシェルジュサービス、プール、ジム完備とあり、何期かに分けての予約販売で全戸数完売したと聞いた。

エリート商社マンの兄は、恋人と結婚したあと、ここで生活ができるようにとマンションを買ったようだ。しかし、出張ばかりですれ違うことも多く、なかなかプロポーズに踏み切れないらしい。

鍵を開けて待つてみると、三十分も経たずに引っ越し業者がやつて来る。

出張でいない兄が紗絵のために空き部屋を掃除していくれるはずもなく、業者がベッドを運び込む前に急いで部屋の掃除をした。

段ボールが部屋の端に積まれていくのを見ながら、肩を落とす。片付けることを考えるだけで頭が痛くなりそうだ。

（これ、一日くらい有給使つても良かつたんじゃない？）

荷造りのほとんどを業者任せにしたとはいえ、使わない家具を一時的に預けるための倉庫の手配や、電気、ガス、水道への連絡。やることは山ほどあつたのだ。

とりあえず寝られるようになつたところで力尽き、紗絵は綺麗になつたフローリングの上でごろりと大の字に寝転がる。

「あああ、もう、お腹空いたー！」

午前中からばたばたと動き、時刻はすでに十五時を過ぎている。紗絵は朝からなにも食べていなかつた。冷蔵庫の整理をしたあと、朝食を買つておくのを忘れたのだ。叫んだところで誰かが用意してくれるはずもない。段ボールの片付けはまだ終わっていないが、休憩を兼ねて近所を歩いてみようと思い立ち、身体を起こした。

ジーンズとTシャツの上からパーカーを羽織り、バッグと鍵を持って部屋を出ると、隣の角部屋のドアが開き男性が出てくる。

「こんにちは」

これからしばらくはこの部屋に住むのだ。挨拶をしておいた方がいいだろうと声をかけた。

しかし男性がこちらを向いた瞬間、紗絵は頭がバグッたような、意識が遠くなつていくような不思議な感覚に陥る。^{おちい}どうやら現実逃避をしていたらしい。

「な、なんで……こんなところに」

「それはこっちのセリフだ」

隣の部屋から出てきた明司は、驚いているというより不機嫌そうな顔で紗絵を睨めつけていた。

そういえばこのマンションは榎谷建設が担当していたんだつた、と思い出すと同時に、隣人が上司という絶望感に襲われる。

(もしかしたら、友だちが住んでて遊びにきただけかも)

けれどその希望は、すぐさま打ち砕かれる。

「社長は、ここにお住まいに？」

「そうだが」^{いちる}

一縷の望みにかけて尋ねるが、呆気なく肯定されてしまった。

「お前は？」

「あの、今日引っ越してきまして」

明司はスーツこそ着ていながら、ワイシャツに緩めのパンツスタイルで、^{ほこり}埃まみれのラフ過ぎる自分の格好とは大違ひだ。

「隣の住人、引っ越したのか」

「じゃなくて、一緒に暮らすことに」

明司はそう言いながら眉を上げた。

「そうか。会社への住所変更手続きを、うつかり忘れるなよ」

兄と、と言う前に話を遮られて、彼は紗絵を置いてエレベーターホールへ向かってしまう。

「さすがに忘れませんよ」

明司の背中を追いかけながら声をかけるが、返事はなかつた。

エレベーターを待つ間も、微妙な沈黙が落ちる。仕事で会話はするが、プライベートの会話などこの六年間に一度だつてしていない。

(別に一緒に来ることなかつたんじや……)

今さら気づいても遅かつた。

さすがに会社から離れた場所で怒られるとは思はないが、明司といふと、またなにか小言を言われるのではと身構えてしまう。

(忘れ物したつて言つて、部屋に戻れば良かつた)

到着したエレベーターに乗り込み、紗絵がロビー階のボタンを押す。

「社長は、お買い物ですか?」

さすがにエレベーター内で「今日はいい天気ですね」という会話もないだろうと、無難な話題を口にすると、明司からは「ああ」とだけ返事があつた。

(続かない……続かないよ!)

間が持たずに紗絵がエレベーターの階数表示にばかり目を向けていると、同じように上を見ていた明司が口を開いた。

「片付け大変だろ? 休みを取らなくて良かつたのか?」

「え、取らせてくれたんですね?」

「え、取させてくれたんですね?」

テンポ良くそう聞き返してしまつたのは、毎日、打ち合わせやら役所への用事やらが詰まつてゐる状況で休みの申請などできるはずがない、という思いからだつた。

「当たり前だ。有給休暇を取得する権利があるんだから使えばいい」

「え、どの口が」

取得する権利があつたとしても休める状況ではなかつたと、誰より知つているはずなのに。当然のように言われると、苛立ちのあまり、つい口に出してしまう。

怒られるかと思ったのに、明司はなにも言わなかつた。

しばらくして突然、隣から小さな笑い声が聞こえてくる。空耳かと首を傾げたところでエレベーターが一階に到着した。

「……じゃ、私はこれで失礼します!」

紗絵は、脱兎の^{だつと}ごとくエレベーターを飛び出し、ロビーを走つた。

「おいつ」

背後から声をかけられても知らないふりをする。

エントランスに出ると、マンションに入つてくる子ども連れの女性とすれ違つた。女性は小綺麗なワンピースに身を包み、子どもと手を繋いでいる。

一方紗絵は、パーカー、埃にまみれたTシャツとジーンズ、薄汚れたスニーカーだ。もちろん、いつもこうではないし、引っ越し作業のための格好ではあるが、なんとなく

ロビーに立つコンシェルジュの視線も不審者を見るような目だった気がした。
 (これ……明らかに浮いてるって。着替えてくれば良かった)

この格好で明司の隣に立つていたと考えると、よけいに恥ずかしくなる。
 (ほんと、こういうところがダメなんだ)

きっと明司にも呆れられたことだろう。

(別に、社長にどう思われたっていいんだけど。そりなんだけど!)

美形の隣に立つには、この格好では戦闘力が足りなすぎるのだ。逃げてきて良かった、
 と胸を撫で下ろしながら、賑わった方へ歩いていく。

この辺りは駅からそれなりに近く利便性もいい。

駅に直結した商業ビルにはスーパーはもちろん、若者向けのファッショングランドも
 多数入っており、買い物にも困らない。

兄は三十五年ローンだと言っていたが、相当の収入がなければローンの審査は通らないはずだ。

(社長の部屋は角部屋だし、たぶんお兄ちゃんの部屋より広いはず……一人暮らしなのかな?)

もしかしたら結婚の予定でもあるのだろうか。遊び慣れていたような印象はあるが、明司の浮いた話はまったく聞かない。ただ、恋人がいないとも思えない。

明司の恋人になる女性はどういう人なのだろう。そんなことを考えていると、私なんて恋人どころか出会いすらないのに、というひねくれた思いが湧き上がってくる。
 (あの人の中人は、こんなぼろぼろの格好とか絶対しないでしょ)
 隣に住んでいれば、この先、明司の恋人とすれば違う可能性もあるかもしれない。ぼろぼろで疲れ果てて帰ったところに、恋人といちゃつく上司の姿を見せられるのはかなりのストレスだ。

紗絵は、職場にも家にも安らぐ場所がなくなってしまったかのような絶望感でいっぱいになりながら、一人焼き肉店の暖簾を潜った。

ランチセットと単品で肉を数種類注文し、それを待つ間、大学時代からの友人へ電話をかける。紗絵の仕事が忙しく、また友人の土日は彼氏のためにあるのでなかなか会えないが、電話だけは頻繁にしていた。

「あ、由美子？」

周囲の迷惑にならないように声を潜めるが、学生やファミリー客が多くかなり騒がしいため、そこまで会話を気を遣わなくても良さそうだ。

『引つ越し終わつたの?』

『終わった。片付けは終わつてないけど』

『なんかざわざわしてない? どこで電話してるのよ』

「焼き肉屋。朝からなにも食べてなくてさー。それより、ちょっと聞いてくれる!?」
紗絵はスマートフォンを右手から左手に持ち替えて、テーブルに置かれた皿を手前には引き寄せる。皿に焼き肉のタレを入れたところで、肉がテーブルに並べられた。

『またなにがあつたの? 憧れの社長と』

茶化すような口調で言われるのもいつものことだ。紗絵がそれだけ明司の話題を出してくるからである。ただ、由美子はなにか勘違いをしているようで、明司と自分が恋愛関係になるような言葉を頻繁に口にした。

（そんなわけないのにね）

紗絵は苦笑しつつ、つい先ほど明司に会つたという話をした。

『まさかの隣人!? え、もうそれ運命じゃない?』

「なに言つてんの。隣にいるとか、朝から晩まで見張られてるみたいじゃん……もう泣きそうだよ』

愚痴を言うために電話をしたのに、なぜか由美子のテンションは高い。

『え、だつて、憧れの人なんでしょ? 昔、梶谷明司さんのそばで仕事ができるなんて幸せ～とか言つてなかつた?』

「言つたよ! 言つたし、今でもそう思つてるけど! 由美子だつて社長の嫌味を聞いたらわかるって。この間なんて『お前は学生時代にもう少し寸法感覚を学んでおくべき』

「だつたな。ちゃんと卒業したのか?』とか言うんだよ!? 信じられない!』

『社長の言つたこと一字一句覚えてる辺り、突つ込みどころ満載なんだけど

『覚えてるに決まってるよ! 私、社長のこと一日中がつづり見てるからね』

『……性格悪いとか言いながらやっぱり好きなんじやないの?』

「好きじやないつてば。本人に言えないとだから聞いてよ! 性格悪すぎてムカつくけど、あの才能の前では性格とかどうでも良くなつちやうんだから仕方ないでしょ。まず外観デザインのセンスが天才的でしょ。それに目立たないところもすごいっていうか。ドS上司だけど、私、ほんと社長のそばで働けて良かった……』

『それで恋愛じゃないとか意味不明。いつも愚痴から始まつて、最後は社長の賞賛で終わるよね』

「憧れと恋愛は違うの」

『へえ、まあ頑張つて。そのうちいい話を聞けることを期待してるんだから。ね、片付け落ち着いたらご飯行こうよ。連絡して。じゃあ彼が構えつて言つてるから切るね』

『ちょ、待つ……切れた』

に運ぶ。
(ん~美味しい!)

紗絵は一人前以上の肉を平らげてお腹を満たすと、街の散策に出かけたのだった。

* * *

明司は遠ざかっていく小さな背中を見送りながら、行き場をなくした手をゆっくり下ろした。声に出そなため息をなんとか呑み込み、エレベーターから降りる。

「一緒に暮らすって言つてたよな」

年下の部下に振り回されている自覚はあるが、声に出すとますます深く落ち込んでしまう。失恋程度でダメージを受ける自分の弱さに顔を蝱めた。

隣に住んでいたのは、自分と同世代の三十代の男だつたはずだ。ただ、思い出そうとしても顔が出てこない。

明司がこの部屋を購入した時にはすでに入居していた。しかし引っ越しの挨拶に何度も行つても隣人は留守で、東京では隣近所と接点がないのも珍しくないかと諦めた。

結局、男の姿を見たのは、転居してかなり経つてからだ。

一緒に住むと言つていたから、隣人の男が紗絵の恋人なのだろう。

結婚に向けてなのか、ただの同棲かはわからないが、隣の部屋で片思いの相手が恋人と暮らし始めるなんて冗談のような話だ。

(建築家として尊敬されてるのはわかるんだが、上司としては嫌われるだろうし、脈なんてほほなかつたからな)

どうしてこれほど紗絵が好きなのか。自分でも疑問に思うことがしばしばある。

まったく明司の気持ちに気づかない紗絵にイライラし、意地で好きでい続けているような気がしないでもない。

迂闊でミスは多いし、十を言つても五くらいしか頭に入つていない。感情が顔に出やすく、客との打ち合わせでは、はらはらすることばかり。

ただ、いつも一生懸命で、彼女の笑つたり怒つたり忙しい感情の変化を気に入つているのもたしかだつた。

本人には、客の前でわかりやすく感情を見せるなど口うるさく言つてゐるのに、変わつてほしくないとも思う。

(今は無理でも、いずれはと思っていたんだが……どうするかな)

彼女が目指す一級建築士になつたら、自分と肩を並べて同じ仕事ができるようになつたら——上司としてではなく一人の男として口説きたい、そう考えていた。

そこまで悠長に構えていられたのは、普段の彼女にまったく男つ気がなく、ほかの男

に取られる心配を微塵みじんもしていなかつたからだ。

(前に恋人ほしいとか言つてたよな？ でも、合コンなんてする暇もなかつたはず。あれからできたのか？)

明司はマンション近くの喫茶店に向かって歩きながら、顎あごに手を当てる。ほんやりと考え方をしていても、歩くスピードは速く迷いはない。

駅と隣接する商業施設にも多数の飲食店が入つてゐるが、土日になると近隣から来る客でごつた返すため、明司は足を延ばして顔馴染みとなつた店主の店を利用していた。モーニングやランチで家庭料理を提供しており、価格も安く、それでいて美味しく、一人暮らしの自分にはありがたい店だ。

古めかしい木のドアを開けて、厨房ちゅうぼうにいる店主に会釈えしゃくをする。若い女性店員がやって来て、すぐに席に案内された。

「いらっしゃいませ。あの、こんにちは」

この店で数ヶ月ほど前から働く女性店員は、頬を染めながら伝票を手に明司のもとへ来る。

彼女のような反応は明司にとってなんら珍しくない。好意を持たれているとわかつても迷惑なだけである。

化粧つ気がなく、美人とは言いがたいが、優しそうな顔つきが厨房にいる女性と瓜二はなかつた。

「ランチプレートを」
「はい、ランチプレート、お飲み物は紅茶ですね」
仕事中に私語をするわけにもいかないのだろう。明司が話しかけてくれるのを待つてるのはわかつたが、それに応えてやる義理もなかつた。

すぐにはくつ面づらをする紗絵にも、これくらい可愛げがあればいいのにとは思うものの、こんな風に彼女から言い寄られるところなど想像もつかない。

「紅茶で」
「淡々と返すと、彼女はがつかりしたように視線を落とし、伝票に注文を書き取つた。
「かしこまりました。お飲み物はいかがなさいますか？」

「はい、ランチプレート、お飲み物は紅茶ですね」
仕事中に私語をするわけにもいかないのだろう。明司が話しかけてくれるのを待つてるのはわかつたが、それに応えてやる義理もなかつた。

すぐにはくつ面づらをする紗絵にも、これくらい可愛げがあればいいのにとは思うものの、スーツ姿は仕事ができる女性といった雰囲気なのに、喋ると台無しやべしなどころもおもしろい。よく食べるわりには腰が細く、胸は意外とある。そんな目で見てしまつているこ

とは絶対に言えないが。

(あと、顔を真っ赤にして怒つてるところもおもしろいしな)
顔に出やすいため、明司を苦手としていることにはすぐ気づいた。だからよけいにからかいたくなってしまい、さらに嫌われるという悪循環。

好きな子をからかうことでしか好意を向けられないなんて小学生か、と間抜けな自分にうんざりするものの、紗絵の表情の変化を見ていることが楽しくてやめられない。

臆さずにぽんぽんと言い返してくるところが特におもしろかった。

「お待たせしました。カレーのランチプレートです。お飲み物は食事が終わった頃にお持ちします」

「ありがとうございます」

紗絵のことを考えていたからか、そうと気づかず女性店員に向かって笑いかけていたようで、彼女が見る見るうちに顔を真っ赤に染めた。

「あ、あのっ、この近くにお住まいなんですか?」

しまったと目を逸らすが、そんな明司の態度に気づかず、女性がチャンスとばかりに話を続けた。明司は内心舌打ちをしたい気分で、視線をテーブルに落とした。

「ええ、まあ。近くのマンションに」

会話のきっかけを作ってしまったことになんざりした気持ちになつたが、こういうこ

とは珍しくもない。明司がスプーンを手にすると、女性は空氣を読んだのか一礼しその場を離れていった。

明司は胸を撫で下ろしつつ、食事を進める。

(隣に住むつことは……あいつが恋人と一緒にいるのを見る可能性もあるのか)

自分には膨れつ面しか見せないが、恋人の前にいる時は甘えた顔を見せるのだろうか。カレーの辛さの中に苦味が混じったような気がして、眉を寄せた。

(引つ越すか……いや、待てよ)

むしろ、隣にいるのだから、今までよりもずっと近づきやすくなるのではないか。プライベートの誘いなどかけても断られるとわかりきっていたため、機が熟すのを待つていたが、それが今なのでは。

(結婚してるわけじゃないんだから、セフレだろ)

これから同棲するという部下と恋人の仲を壊すのは忍びないが、ようやく来たチャンスだとも考えられる。

もちろん彼女に無理強いをするつもりは毛頭ないし、振られたら諦めるくらいの分別はある。だが、なにもせずに諦めるつもりもなかつた。
(こんなにも好きだと思ったのは、あいつだけなんだ)

明司は、紗絵と出会った時のことを思い出し、食事の手を止めた。

大学卒業後、父が社長を務める槌谷建設に入社したのは、前々から決まっていたことだつた。

面接とも言わぬ面接を通り、おためごかしの親切をやり過ごしながら、槌谷建設に依頼される大型案件に携わる日々は、充実しているようでそうでもなかつた。忙しくやりがいはあつたが、いつもなにか違うと思つていた。

そんな時だつた。父から、面接を担当する役員の一人が病欠だから人数合わせに来いと言われたのは。

面倒だつたが、断る理由もなかつたために従つた。

新卒者の人事面接会場となる会議室では、自分を含め、横一列に並んだ役員たちの前で一人一人の面接が行われていた。

(全員同じに見える……)

ありきたりな自己アピールにうんざりしてきた頃、次の面接者の順番が来て、ひとり高い声が会議室に響き渡る。

「本田紗絵です！ 榎谷明司さんに憧れて、追いかけてここに来ました！ 榎谷建設以外で働きたくありません！」

まさか大学生の口から自分の名前が飛び出すとは思わず、明司は手に持つたペンを落

としそうになりながら彼女の顔を凝視する。

彼女は、緊張なのか興奮なのか頬を赤らめ、一生懸命自己アピールをしているものの、その内容のほとんどが建築家、榎谷明司の話で、担当する面接官も苦笑を漏らしていた。自分をアピールしないで、いかに明司が建築家として優れているかを語つてどうする

と皆が思い始めた時。

「いつか……榎谷明司さんの設計する家を見たいんです。国際コンペで最優秀作品賞を取つた『ずっと住み続けられる家』は、まるで本当にそこに人が住んでいるみたいでした。そこに住む誰かを想像して造つたつてわかつたんです。あんな風に誰かの心に触れる作品を手がけたいと思いました。榎谷さんの近くで働きたい。部下になりたいんです。御社が個人住宅の仕事を請け負つていよいのは重々承知していますが、少しでも可能性があるなら、諦めたくないんです」

まさか、コンペに出した明司の作品を知つている学生がいるとは思わなかつた。国際コンクールではあるものの、学生向けのコンペということもあり新聞に小さく載つた程度なのに。

二十代で受賞した建築賞の話題は、関わる人の口に度々上つたが、まさか学生時代に制作した『ずっと住み続けられる家』について熱く語られるなんて夢にも思わなかつた。(あれについて褒められるのは……くすぐつたいというか、恥ずかしいというか)

隣に座る父が、なにやらニヤニヤ笑いを浮かべて彼女を見て、明司に視線を向ける。

明司は二人から目を逸らし、赤くなりそうな頬を手のひらで押さえた。

学生時代に制作した『ずっと住み続けられる家』は、自分が理想とする家族像を模型として形取ったものだ。

明司が物心ついた時には、両親の夫婦仲はすっかり冷え切っていた。

自分を育ててくれたのは住み込みの家政婦のチエだし、勉強を見ててくれたのは家庭教師だ。父とはそれなりに話す機会はあったが、母とは顔を合わせることも少ない。大学に入った頃には、互いをいない人として扱う両親にうんざりして家を出たものの、心の根底にある家族への憧れは人一倍強かつた。

幸せそうな家族に憧れと妬みはあつても、自分は世間一般から言えば非常に恵まれている。だから誰にも言えなかつた。

あの作品は、そんなもやもやした気持ちを抱えていた自分が、もしなにか一つでも違つていれば、こんな未来もあつたのではないかと考えながら作ったものだつた。気持ちを作品としたことで、自分自身が救われたような気がした。運良く最優秀作品賞という結果になり、気持ちに一区切りついた瞬間でもあつたのだ。

（あの時……家を造る楽しさを知ったんだよな。まあ模型なんだが）

梶谷家では叶えられなかつたが、家族と自然に会話ができる家を造りたい。そこに住

む人に笑顔をもたらしたい。

そんな思いが、あの頃から自分の心の奥底にあつたのだと気づいた。

毎日の仕事に不満はないのに、どこか空虚な思いを抱えていた理由はこれだつたのかと悟り、胸が熱くなつた。

明司は噴きだしそうになる口元を押さえて、手元にあるメモ帳に『本田紗絵』と名前を書いた。

おそらく目の前の椅子に座る彼女は、自分が熱く語っている梶谷明司がこの場にいるなんて夢にも思つていいだろう。

インターネットで調べればいくらでも経歴は出てくるが、写真はない。彼女が明司の顔を知らないであろうことは簡単に想像がついた。

（本田紗絵か。望み通り俺の部下にしてやるつてこの場で言つたら、どんな顔をするかね）

その後、父に頼み、梶谷建設の子会社として梶谷住宅を^{ほつぞく}起業した。父が決めたメンバーの中に、入社したばかりの本田紗絵の名前を見つけた。なんだか父の手のひらの上で転がされている気がしないでもないが、断る理由はない。

上司として手取り足取り仕事を教えてきたのは、自分に道を示してくれたことへの感謝と、個人的に紗絵を気に入つたからだ。

最初こそ明司の顔に騙されたのに、人間性を知つていくうちに彼女の目に落胆が見えて、それが非常におもしろかった。

槌谷明司という男をどこか神聖視しているようだったから、理想の像が崩れたのだろう。それでいいと思った。

その頃には、偶像ではなく一人の男として彼女に自分を見てもらいたいと望んでいたから。

(性格の悪い上司と思われてるのを知つていて、何年好きでいると思つてるんだ。簡単に手放せる程度の気持ちなら、こんなに焦がれてはいないだろう。)

自分自身にそう言い聞かせる。

略奪など自分の趣味ではない。

紗絵の幸せを壊したいとは思はないが、なにもしなければ始まりさえしない。黙つて見守つているだけの時間はもう終わりだ。

(楽しみだな)

彼女をどうやって捕らえるか、考えるだけで気持ちが湧き立つ。もし紗絵がこの場にいたならば、自分の顔を見て一日散に逃げだしたことだろう。明司は食事を終えると、会計のために席を立つた。視線でアプローチしてくる女性店員には目もくれず、愛しい部下に思いを馳せるのだった。

第三章

一日片付けに追われた日曜日が過ぎ、翌月曜日。

紗絵はいつもよりも三十分早く起き、身支度を調えた。

(ドアを開けた瞬間に社長の顔は見たくなりし、うん、早く行こう)

明司がいつも会社に着く時間は、八時四十五分。始業十五分前だ。このマンションから会社までは徒歩と電車を合わせて約四十五分。

本来は八時前に家を出れば十分に間に合うのだが、そうするとばつたり明司と会ってしまう可能性が高い。少し早過ぎる気もするが、七時半に家を出た。

(気づかれませんようにならへー！)

紗絵は、ゴミ袋を持ちながら足音を立てないように廊下を歩いた。

エレベーターホールを見回し、明司の姿がないことを確認する。エレベーターに飛び乗り、閉まるボタンを連打してほっと息を吐いた。

(混雑する電車内では会うことはないだろうし、まだ時間もあるから、どこかでモーニングでも食べていこうっと)

駅に隣接する商業施設内には、フードコートやレストランが多数入っているものの、土日は混雑していて一人でまつたりと過ごせるような場所はなさそうだった。

土曜日に駅までの道を探索し、朝から開いている喫茶店や、ランチに使えそうなレストランをいくつか見つけた。紗絵は手に持ったゴミを捨てて、その中の一つに向かって歩きだす。

(ここ、通りかかつて気になつてたんだよね)

駅に向かう途中にある五階建てビルの一階に、こぢんまりとした喫茶店が入つている。ビルの外階段の踊り場に設置されたボストは二つで、一つは喫茶店の名前、もう一つには名前が入っているため、二階より上を倉庫や住居として使用しているのかもしれない。ビルも喫茶店も、商業施設に比べると古めかしさが拭えない。木の枠のはめ込みガラスで造られたドアを押すと、カランとベルが鳴り響く。

(昔からある店は、絶対に美味しいって相場が決まってるんだから)

温かみのある木目調のタイル床や、同じ色合いのテーブルや椅子が目に入った。白い壁は経年劣化により多少薄汚れているが、掃除は行き届いているようだ。店内はそう広くなく、カウンターの奥には厨房ちゅうしつがあつた。お腹が空すくようない匂いが漂つてくる。

「いらっしゃいませ。お一人様ですか?」

「はい」

二十代くらいの女性店員に声をかけられて席に案内された。

二人席が二つと、四人席が四つ。あとはカウンターのある店内の席は、まばらに埋まつていた。

カウンターの奥にいるのは四、五十代の男女だ。夫婦と娘で店を切り盛りしているのかもしれない。

紗絵はメニューを見て、ワンコインで食べられるモーニングを注文した。するとドアベルが鳴り響き、店内に客が入つてくる。なんともなしにそちらに目をやると、入ってきたばかりの男性客と目が合つた。

(うそでしょ!)

一瞬、彼がやりと笑つたような気がする。店員の案内を断り、こちらに向かつくるのはなぜか、目の前の椅子を引き堂々と座るのはなぜなのか。

「おはようございます」

「朝から鬱々としたため息だな。飯がまづくなりそうだ」

「誰のせいだと——その言葉をなんとか呑み込んで、紗絵は笑みを浮かべた。

(飯がまづくなりそうなら、ここに座らなければいいのでは……つ?)

額に青筋が浮かぶが、口には出さない。

朝から明司に会わないように早く家を出てきたというのに、まさかそれが裏目に出る

とは思わなかつた。雰囲気のいい店で氣に入つたが、もうここには來ない。明日からは家で朝食をとろうと決める。

「モーニングを。飲み物はホットコーヒー」

「かしこまりました。あの……今日は、お一人じゃないんですね」

女性店員が明司に声をかけた。どうやら明司はこの店の常連らしい。ますます店選びを間違つたとしか言いようがない。

「ええ、まあ」

明司は紗絵との関係を濁^(ほ)し、そう答える。女性は氣になつてたまらないのか、明司と紗絵を交互に見ては、なにかを言いかけて口を閉じた。

「社長は、こちらによくいらっしゃるんですか?」

彼女の気持ちを察した紗絵は、問題にならない程度に助け船を出す。
女性店員は紗絵が部下だと知つて安心したのか、口元を緩めて伝票を手に厨房へ声をかけた。

「たまにな」

「へえ、そうですか。相変わらずモテますね」

このようなことは珍しくない。

今まで仕事中、明司に同じような視線を向ける女性は数多くいた。当然、紗絵を相

手にした時のような嫌味なんて言うはずもないから、実地調査に赴くだけで近隣の奥様方がわざわざと寄つてくるくらいだ。紗絵はそのたびに明司の本性を暴露したくなる。

「そうか?」

明司は飄々^(ひょうひょう)と答える。気づいているくせにと睨^(にら)んでも、軽く受け流された。

「別に、いいんですけど」

「へえ、嫉妬^(しづく)でもしてるのかと思つた」

「し、してゐわけないぢやないですか! 変なこと言わないでくださいよ」

図星を突かれたわけでもないのに、頬が熱くなつてくる。百戦錬磨の男にかかれれば、ここ最近恋人のいない紗絵など赤子の手を捻るより簡単に弄ばれてしまいそうだ。

「お前になら、嫉妬^(しづく)されるのも悪くないと思つたのになあ、残念」

真つ直ぐに見つめられ、人が違つたように微笑まれる。

怒られてばかりだからか、あまり明司の笑つた顔を見た記憶がない。だが、こんな顔で見つめられたら、ドSで性格が最悪な上司であつても見蕩^(ちよぶ)れてしまう。明司の目を見ていられず、いつものように膨れつ面^(ぱん)で目を逸らした。

「社長? 疲れてます? なんか変ですよ」

「お前よりは元気だよ」

最近仕事が忙し過ぎるせいで、紗絵が別の女にでも見えているのだろうか。